

2025 年 6 月 1 日（日）「戦場の中の逃れ場」

ヨハネの黙示録 12:13-18

13 竜は、自分が地上へ投げ落とされたと知ると、男の子を産んだ女の後を追った。14 しかし、女には大きな鷲の翼が二つ与えられた。荒れ野にある自分の場所へ飛んで行くためである。女は蛇から逃れ、そこで一年と二年と半年の間、養われることになっていた。15 蛇は、女の後ろに水を口から川のように吐き出して、彼女を押し流そうとした。16 しかし、大地が女を助けた。大地は口を開けて、竜が吐き出した川を飲み干したのである。17 竜は女に対して激しく怒り、その子孫の残りの者たち、すなわち、神の戒めを守り、イエスの証しを守る者たちと戦うために出て行った。18 そして、竜は海辺の砂の上に立った。

【序論】

黙示録を学ぶ中で何度も思い起こすべきことがあります。それは、本書に書かれている不思議な記事は、複数の時代を同時的に見ることで理解できてくる傾向があるということです。中には三つの時代が重なり合っているものもあり、本書が書かれた時代、読者が生きている時代、最終末期という見方が当てはまる場合もあります。今日の記事もまた、そのような視点をもって読み解くとき、目に見えない世界で起きていることが理解できてくるでしょう。聖書は隠された真理を伝えている書であり、特に黙示録のような預言書は暗号を解いていくような性格を持っているのです。暗号が解かれると、未来が開け、来るべき時に備えてどう生きるかが示されてまいります。説教者としては、「それでは私たちはどう生きるべきか」というところまで落とし込むことが目標です。

【本論】

本論A. 荒れ野へ逃げ込む女

竜は、自分が地上へ投げ落とされたと知ると、男の子を産んだ女の後を追った。(12:13)
12 章には、竜が地上へ「投げ落とされた」という表現が何度も出てきます(9 節、10 節、13 節)。これは、主イエスが十字架と復活により死と悪魔に打ち勝たれたこと、そして悪魔の権力が決定的に砕かれたことを意味します。主イエスは天に昇り、悪魔はもはや指一本触れることもできなくなった。そして、あとは最後の審判での審きを待つのみとなりました。もはや逃げ場を失った悪魔は最後のあがきを始め、一人でも多くの信仰者を引き摺り下ろそうと地上での活動を始めました。「男の子を産んだ女の後を追った」というのは、この「女」がここでは「キリストのからだなる教会」を意味しますので、悪魔が信者の群れを次々と襲うという状況が想定されます。

しかし、女には大きな鷺の翼が二つ与えられた。荒れ野にある自分の場所へ飛んで行くためである。女は蛇から逃れ、そこで一年と二年と半年の間、養われることになっていた。

(12:14)

「鷺の翼」というのは象徴的な表現ですが、旧約聖書でも神がイスラエルの民を救い出された出来事が「鷺の翼の上に乘せた」という言い方で表されている箇所があります。

- ・ 私がエジプト人にしたことと、あなたがたを鷺の翼の上に乗せ、私のもとに連れて来たことをあなたがたは見た。(出 19:4)
- ・ 鷺がその巣を揺り動かし、雛の上を舞い、羽を広げて雛を取り、翼に乗せて運ぶように。(申命 32:11)

これらのイメージは、実際の鷺の行動になぞらえられています。鷺の雛が飛べるようになると、親鷺は子鷺を空高く連れ出します。子鷺が飛び疲れると親鷺はその下に急降下し、子鷺を背中に乗せて巣に戻ります。このような鷺の習性を観察した人がいたのでしょうか。神はイスラエルをそのように守っておられると言っているのです。そして、それと同じ「守り」が教会という神の民にも与えられると。

「荒れ野」もまた、信徒たちが安らぐ安全な場所として描かれています。これもまた象徴的な表現です。これは「霊的避難所」であり、どこか特定の地域を指すのではないでしょう。世の中が荒れ狂うときにも、信徒たちは心一つに集まって、主イエスの御言葉を聞き、心を合わせて賛美をささげ、励まし合い、勇気を与え合うことができる。そのようなところは「礼拝」を置いてほかにないでしょう。この世の戦いに疲れた者が主の許に帰って行って憩うのです。

たった今、「どこか特定の地域を指すのではない」と申しましたが、そうとも言い切れないかもしれません。まさに「霊的避難所」として作られた施設がこの日本にも存在します。2014年に私が病気で苦しんでいたとき、ムラサキスポーツの金山会長のご厚意により、私は一週間「日光オリーブの里」の「祈りの家」で寝泊まりさせていただきました。金山長老と電話でお話したとき、こう言われました。「日光オリーブの里では、とにかく祈りに時間を当てるんだよ」と。私はその静かな施設で神と一対一の対話に集中し、奇跡を体験しました。あれほど苦しんでいた「コリン性蕁麻疹」が癒されたのです。日曜日には施設での礼拝に参加しましたが、チャブレンの方がこうっておられたのが印象的でした。「この施設は、戦いに疲れた働き人が休むためにあるのです」。まさに、私のために存在してくれていた施設でありました。

このような私の逸話はさておき、信者一人ひとりにとって、「神の許に帰る」ということが、ここでの「荒れ野」の意味するところだと思います。「一年と二年と半年の間」という表現は、「四十二か月」「1260日」「三年半」などとも言い換えられますが、歴史の最終末期を象徴的に表しています。この期間には悪魔の迫害が激化しますが、教会にはどんなときにも「逃れ場」があるのです。重要なことは、信者が神のことばから離れてしまうと、思いがけない形で悪しき者の影響を受けやすくなるのです。だからこそ、私たちはいつも神のことばに留まり続けましょう。

本論B. 蛇からの守り

蛇は、女の後ろに水を口から川のように吐き出して、彼女を押し流そうとした。しかし、大地が女を助けた。大地は口を開けて、竜が吐き出した川を飲み干したのである。(12:15-16)

「水を口から川のように吐き出して」とは、悪の勢力が怒涛のように押し寄せてくることの表現でしょう。神の民も試練に遭います。悪魔は何とかして聖徒の交わりを壊そうとしますが、聡明な信徒たちはその欺瞞を見抜いてそうはさせません。「大地は口を開けて、竜が吐き出した川を飲み干した」とは、信徒の群れを押し流そうとする悪魔の働きを無効にする神の守りです。信徒たちは常に目を醒まし、神からの知恵に満たされ、悪魔が何を仕掛けてくるかを見極める必要があります。心が悪魔に囚われやすい状態になっているとき、人は狙われるからです。

竜は女に対して激しく怒り、その子孫の残りの者たち、すなわち、神の戒めを守り、イエスの証しを守る者たちと戦うために出て行った。(12:17)

先に悪魔はミカエルとその天使たちと戦いましたが、打ち負かされました(12:7-8)。そして、その攻撃の矛先は「弱さ」を持つ人間へと向かったのです。次のターゲットは「**神の戒めを守り、イエスの証しを守る者たち**」でした。信仰に立ち続ける者の姿は、悪しき者にとって大きな障壁となるため、あらゆる手を使って惑わそうとするのです。何としても信仰から離れさせ、自分がやがて投げ入れられる「火の池」に一緒に引き摺り込みたい。悪魔はその目的を果たすために、時に脅し、時に誘惑し、時に異端的な教えを送り込み、手段を選びません。まるで四方から矢が飛んで来るように、教会は狙われている。悪しき者は外からの働きかけだけでなく、時に私たちの内にある弱さや怒りやすいポイントをも利用しようとするのです。パウロが列挙している罪は、現代の教会も気をつけなくてはなりません。

それとも、正しくない者が神の国を受け継げないことを、知らないのですか。思い違いをしてはいけません。淫らな者、偶像を礼拝する者、姦淫する者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に溺れる者、人を罵る者、奪い取る者は、神の国を受け継ぐことはありません。(I コリント 6:9-10)

私たちは自らの生活を省み、もし罪を犯しているならそれを悔い改める必要があります。神様との関係が悪いところに悪魔はつけ込むからです。

悪魔の策略に対して立ち向かうことができるように、神の武具を身に着けなさい。私たちの戦いは、人間に対するものではなく、支配、権威、闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊に対するものだからです。それゆえ、悪しき日にあってもよく抵抗し、すべてを成し遂げて、しっかりと立つことができるように、神の武具を取りなさい。つまり、立って、真理の帯を締め、正義の胸当てを着け、平和の福音を告げる備えを履物としなさい。これらすべてと共に、信仰の盾を手に取りなさい。それによって、悪しき者の放つ燃える矢をすべて消すことができます。また、救いの兜をかぶり、霊の剣、すなわち神の言葉を取りなさい。どのような時にも、霊によって祈り、願い求め、すべての聖なる者たちのために、絶えず目を覚まして根気よく祈り続けなさい。(エフエソ 6:11-18)

今という時代が、キリスト者にとって悪魔との決戦の時であることを常に銘記して歩んでいきたい。霊的な世界は多くの人の目に隠されています。しかし、聖書はそれを明らかにし、私たちの心の中でも、教会生活においても、絶えず悪魔の働きかけがあることを示しているからです。

そして、竜は海辺の砂の上に立った。(12:18)

聖書では「海」とは、神に敵対する混沌とした諸勢力や怪物が住む場所として描かれる傾向があります。竜が「**海辺の砂の上に立った**」のは、続く 13 章において二頭の獣を呼び覚ますためでしょう。その「獣」が何を意味するのかは、これから考えていかななくてはなりません。過去に起きた悪魔的な国家の出現も然り、今という時代に起きつつある世界規模の大変革との関係にも目を凝らしながら、この先の記事を学んでいきたいと思います。

【結論】

いずれにしても、今日の記事のポイントを掴むならば、悪魔があの手この手で攻撃を加えてきたとしても、聖徒たちには常に「**荒れ野**」という逃げ場が用意されていることを忘れないようにしたい。それは「神の懷」であり、礼拝の場であり、聖徒の交わりのあるところです。そこで私たちは共に神のことばに耳を傾け、光の武具を身に着け、颯爽と世に出て行くのです。武器も持たずに戦場に出ることは危険です。キリストにある交わりの中で、いつも霊的養いを受け続けましょう。

【祈り】

天の父なる神様、今日の御言葉を感謝いたします。あなたは、荒れ狂う戦場のただ中であっても、私たちに「逃げ場」を備えてくださる方です。私たちは日々、知らず知らずのうちに霊的戦いの中に身を置いています。あなたの愛と御言葉によって守られ、導かれていることを信じます。どうか私たち一人ひとりが、礼拝を霊的な憩いと養いの場とし、日々の歩みの中で、神の武具を身にまとい、確かな信仰をもって立ち続けることができますように。共に戦い、共に祈り、共に希望を語り合う、神の家族として私たちを用いてください。

【祝祷】

戦場のただ中で、あなたを力づけ、再び立ち上がらせてくださる、主イエス・キリストの恵みと、
あなたを荒れ野へと導き、憩いと回復を与えてくださる、父なる神の愛と、
日々の歩みの中で、あなたを守り、神の家族とのつながりの中で、励ましを注ぎ続けてくださる、聖霊の親しき交わりが、
ここに集う会衆一同の上に、今も後も、代々限りなくありますように。